

SMC金融・経済マーケットレポート

Reporter Your Financial Brain SMC 豊島 健治

苦戦の中小企業専門銀行 (新設銀行の中間決算から)

今週、日銀が政策金利を「予定通り」0.25%引き上げ0.5%とした。そして、マーケットは「予定通り」円安・株高で反応した。市場は金利が正常化するまでまだ時間がかかると見ていて、次の上げさえしばらくないと見透かしているのだろう。多分、政策金利が1%台に乗るのは来年になる。しかし、上げ幅はわずかでも中小企業金融に与える影響は少なくない。社長は、短期金利上昇を覚悟しておくべきだ。

ところで、先頃、東京都が主導して04年に設立した中小企業向け融資を事業目的とした新銀行東京の経営不振が伝えられた。貸出は計画を大幅に下回り、赤字額も拡大、早くも銀行自体が経営再建に取り組みざるを得ない状況に追い詰められているというのだ。期待されながらスタートした新銀行は一体どうしたというのだろう。

気になって、同じく既存銀行の「貸し渋り」を批判し中小企業専門銀行を作るんだという熱意を結集して設立された日本振興銀行も見てみたくなった。設立時からごたごたが続く等むしろゴシップが目立った銀行だが、その後赤字状態からは脱しただろうか。依然として「木村頼み」の状態にあるのだろうか。

以下、両銀行の直近9月中間期の数値である。

	新銀行東京	日本振興銀行
業務純益	4,553	NA
一般貸倒引当金	5,046	NA
コア業務純益	9,600	4
不良債権処理損	5,828	701
経常利益	15,415	279
貸出金残高	234,908	22,823
貸出金利回り	2.86%	NA
預金金利回り	0.90%	NA

(単位：億円)

貸出残高が10倍違うので単純比較は無理があるが、一般企業で云う所の営業利益に該当するコア業務純益では、日本振興が辛うじて黒字、新銀行東京は100億近い赤字。そこに不良債権処理が加わるから両行とも経常段階では赤字となっている。問題は赤字の原因である。

一部推測も入れて云うしかないが、第1に貸出金利が想定以上に低かったことがある。その一方、預金を集めるのに預金金利を高くせざるを得なくなり、結果として預貸金利鞘はリスクが大きい割りには小さくなった。貸出金利息収入を主体に据えるビジネスでは、競合激化による利鞘縮小は大きな打撃である。

第2は、想定以上の貸倒発生がある。新銀行東京は中間期で58億強、日本振興も7億以上も不良債権を処理した。それまでの処理と今後の処理を考え合わせると、貸出残高に対する処理割合はかなり高いものとなる筈だ。

これは設立経緯からすれば当然予想されたことかもしれない。新銀行の趣旨に賛同して取引を始めた中小企業もあるだろうが、既存銀行から要注意先として弾かれた中小企業が窓口に殺到したことは想像に難くない。とすれば、貸出残高を増やすためある程度目をつむって融資したとしても不思議ではない。

そして第3には、経済金融環境の変化を見誤ったことにある。

大手銀行を始め銀行が「担保や保証に頼らない」貸出を積極化したことから既存銀行との差別化が難しくなった。今までの銀行で借りられるなら敢えて新銀行から借り入れる必要もないという当たり前のことが起こったのだ。

その上、中小企業が財務リストラを進め自己資本を強化する中、資金需要そのものが低下してきたことも一因として挙げられるだろう。

いずれにせよ、中小企業融資を専門とした銀行は今岐路に立っている。そんなビジネスモデルが成立するのかがどうかに直面している。その意味で新銀行東京の再建の行方が注目されるが、私自身としては何とか新たなビジネスモデルを構築して欲しいと思っている。

先日、ある会社が日本振興銀行に借入打診のメールを送った。驚いたことに、その翌日支店の担当者が飛んできた。一定の事前調査はしていたらしく、社長に面接した後会社の現場をみて帰った。可否の回答はその翌日あったと聞いたが、その迅速性は「へっ」と唸らせるものがあった。しかし、この素早さは現場に融資案件が少ないことの裏返しとも云える。

今、中小企業専門銀行の苦戦が続いている。